

田中次郎:自然史学会連合総会報告

総会

1996年10月26日に東京大学教養学部で21学会の代表者の出席と5学会からの委任状により総会が開かれた(議長:森脇和郎日本遺伝学会代表)。以下に総会と運営委員会での報告, 審議事項をまとめた。

1. 加盟団体

日本蜘蛛学会(西川喜朗会長, 日本学術会議登録団体, 本部は追手門学院大学)と日本菌学会(宮治誠会長, 日本学術会議登録団体, 本部は日本学会事務センター)の加盟を, 運営規則「連合への加盟と連合からの脱退は各団体の自由意志による。ただし, 日本学術会議登録団体以外の加盟希望についてはその適否を連合の総会で審議する」に則り承認した。藻類学会会員で他の自然史関連学会に所属の方は連合への加盟をご検討下さい。

加盟団体は上記2学会を加え以下の32学協会となった。種生物学会・植物分類地理学会・植物地理分類学会・地学団体研究会・(社)東京地学協会・日本遺伝学会・日本衛生動物学会・日本貝類学会・日本花粉学会・日本魚類学会・日本古生物学会・日本昆虫学会・(社)日本植物学会・日本植物分類学会・日本人類学会・日本生態学会・日本生物地理学会・日本蘚苔類学会・日本藻類学会・日本第四紀学会・日本地質学会・日本地理学会・(社)日本動物学会・日本動物行動学会・日本動物分類学会・日本鳥学会・日本ベントス学会・日本哺乳類学会・日本鱗翅学会・日本霊長類学会・日本蜘蛛学会・日本菌学会

2. 文部省科学研究費時限付分科細目「自然史科学」

平成9~11年度「自然史科学」が認められた。日本学術会議に対して自然史学会連合から審査員候補者を12名推薦した。審査員(6名)は未定。この分科細目に多くの申請が出されることを希望する。なお審査員候補者は, 加盟学協会をいくつかのグループに分け, 審査員が特定の分野に偏らないよう選出した。今回審査員を出した学協会は次回は交代する。

3. 顧問

研連など各学問分野に影響力を持つ方を顧問とすることが決定され, 加納六郎(動物研連), 丸山工作(動物学会), 岩槻邦男(植物分野), 小野勇一(生態), 尾本恵市(人類), 佐藤正(地質研連)の6氏を顧問として迎えることが承認された(任期1年)。

4. 分担金

連合の運営やシンポジウム開催等の活動資金とし

て, 各団体一律2万円の分担金をお願いすることとなった。金額は毎年考えていく。拠金の方法については各団体が審議する。なお, 会計年度は1997年9月より翌年8月である。会計監査の必要も生じることとなった。

5. 第3回自然史学会連合シンポジウム

来年秋の総会時に開催する。テーマ, 日時, 会場等は運営委員会に一任する。

6. 「ガイアリスト21」(地球上の全生物の記載と情報化構想)

(社)日本動物学会が主体となって計画を作成している国際的プロジェクト「ガイアリスト21」のアクションプランが紹介された。計画の骨子は, 1) 地球上の全生物種の包括的生命情報の記載と分類を行う, 2) 記載した生物種の配偶子等の細胞や抽出したゲノムDNAを保存管理する, 3) これらに要する分類学者, 分子生物学者, 技術者等の養成を行う, 4) これらの事業を行うガイアリストセンター(仮称)を設置する, 5) 世界的な規模で実施し, 5年を1期とする10期を計画する, 6) わが国が主な資金提供国となって計画遂行に当たるが, 研究者や技術者の採用に当たっては国籍を問わない。素案によれば, 2001年の設置を目標とし, 設置のために, 関係各学会と諮って早急に準備委員会を作るとのこと。自然史学会連合としてもバックアップすることで意見が一致した。

7. 自然史アーカイブス(資料保存室)

科学史上重要な資料の保存は急務であるので, (社)日本動物学会の動物学資料保存委員会(代表八杉貞雄都立大教授)と連絡をとりながら, 各地に死蔵されている文献資料等の保存を考えていく具体案を作成することになった。例として名古屋大学に名古屋大学史資料室が設置され, ニュースが発刊されている。速水代表幹事著「アーカイブスの必要性」(化石, 58:51-52)の別刷が各学会に配布された。

8. タイプ標本の保存

古生物学研連から要請のあった学術標本保全に関する提言と要望に基づき, 種々のタイプ標本をできるだけ早い時期にデータベース化するべきであると意見が一致した。数年前, 国立科学博物館が中心となって調査をしたことを含め, どのように具体化するかが今後の課題である。

9. ホームページの開設と各団体会員への連絡

試験的に国立科学博物館のサーバーを利用してホー

ムページを作成し、現在入力を開始している。加盟学会が多いため、各学会に割り振ることができるページ数はあまり多くないが、今後学会関連および自然史関連の諸情報を掲載していきたい。また、すでにホームページを開いている団体にはリンクの許可をご考慮いただきたい。ニュースは不定期に発行し、連合担当幹事に送付し、連絡事項などはe-mailあるいはファクスで送ることになっているが、各団体会員への連絡周知は連合担当者が責任をもって手段を講じる必要がある。今後はホームページを積極的に利用していきたい。

10. 国立自然史博物館新設の要望、ユニバーシティミュージアム（大学博物館）建設構想への提言

自然史学会連合設立の当初からの要望であり、今後も学会会議や関連組織と密接な関係を保ちながら進めていく。学会会議としては国立科学博物館との関連も考慮しつつ計画を進めている。

自然史学会連合第2回シンポジウム報告

「未来の自然史教育を探る—科学者の眼、子どもの眼」と副題されたシンポジウムが1996年10月26日、東京大学教養学部大講義室で行われた。演題は、みんなの科学、自然史（速水格、神奈川大学理学部）、教育現場からの提言「今、子どもに自然史を」（矢鳥道子、東京聖徳学園）、海からの提言「本当の自然の海を残すために」（杉浦宏、国際学院埼玉短大）、森からの提言「森

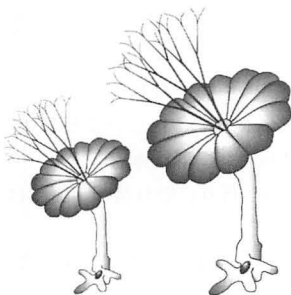
の時間、人の時間」（中静透、京大生態研究センター）、空からの提言「鳥の渡りと地球環境の保全」（樋口広芳、東大大学院農学生命研究科）、地球からの提言「野生のいのちを考える—自然と生命との相関の不思議さ—」（ジョージ・B・シャラー、アメリカ野生生物保護協会、(財)国際花と緑の博覧会記念協会第4回コスモス国際賞受賞）の6題であったが、「教育」を重視したシンポジウムの感があり、研究者や学生が敬遠したこと、宣伝が不足したために教育現場からの参加も予想以上に少なかったのが残念であった。当日配布された講演要旨の残部は各加盟学会に適当部数が送られた。なお会場設営などの運営費は日本植物分類学会が受けた科研費補助金と(財)国際花と緑の博覧会記念協会からの援助金を利用した。

運営委員会

現在の連合の運営委員は以下の通り。その任期は1995.10～1997年の総会までとされた。改選は全員の交代を原則とする。武田正倫（代表委員：日本動物分類学会：国立科博・動物）・斎藤靖二（日本地質学会：国立科博・地学）・白山義久（日本ベントス学会：東京大学海洋研究所）・田中次郎（日本藻類学会：東京水産大学）・西田治文（日本植物分類学会：国際武道大学）・馬場悠男（日本人類学会：国立科博・人類）。

（自然史連合担当幹事 〒108東京都港区港南4-5-7 東京水産大学資源育成学科）

表紙の説明



今回の表紙はカサノリのイラストである。もともとは、石川依久子先生の「会長ごあいさつ」に添えるカット用にお預かりしたイラストなのだが、なかなか可愛らしいので表紙に使わせていただいた。なおイラストの作者は東京学芸大学の大学院生蒔田紀彦さんである。